





【齐明天皇】

岡本天皇の御製一首 短歌を并せたり

①神代より 生れ継ぎ来れば 人多に 国には満ちて あぢ群の 去来は行けど わが恋  
ふる 君にしあらねば 昼は 日の暮るるまで 夜は 夜の明くる極み 思ひつつ 眠  
も寝がてにと 明しつらくも 長きこの夜を(四・四八五)

反歌

②山の端にあぢ群騒き行くなれどわれはさぶしゑ君にしあらねば(四八六)

【中皇命】齐明天皇か？ 間人皇女か？

天皇、宇智の野に遊獵したまふ時、中皇命の間人連老をして 献らしめたま  
ふ歌

①やすみしし わご大君の 朝には とり撫でたまひ 夕には い倚り立たしし 御執  
らしの 梓の弓の 奈加弭の 音すなり 朝獵に 今立たすらし 暮獵に 今立たす  
らし 御執らしの 梓の弓の 奈加弭の 音すなり(一・三)

反歌

②たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野(四)

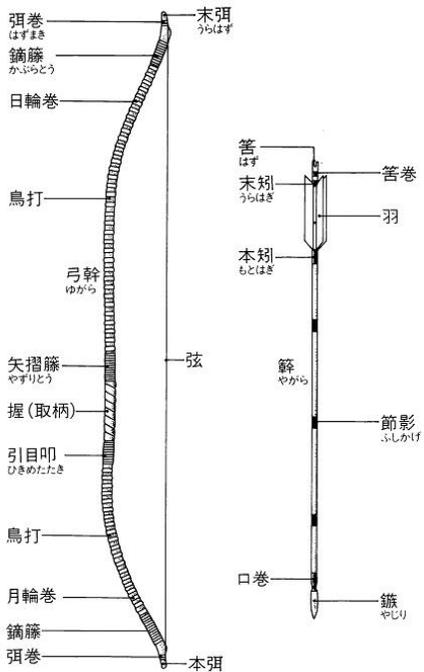
《参考》

\*①の歌の「奈加弭」が意味不明。

弭 ゆはず

弓の両端で弦をかけるところをいう。……弓が木製であるばあいには、その両端を細く、あるいは扁平に削って弦をかけやすくし、溝や切りこみを作って弦がはずれないようにしたものは多い。これを木弭とすれば、骨・角を彫刻して弓の両端にはめたものは骨弭・角弭、金銅・銀などの金属で作ってかぶせたものは金弭である。……弭金物は5〜7世紀の古墳時代の遺品があつて、……「小林 行雄」

(『世界大百科事典』)



一張 長七尺二寸七分 鹿毛漆 末弭継銅 目判 紫皮纏弓把  
名金弭 錦袋緋綾裏

(東大寺献物帳)

【額田王】

A 天皇、有司に命せて壇場を設けて、飛鳥淨御原宮に即帝位す。正妃を立てて皇后とす。后、草壁皇子尊を生れます。先に皇后の姉大田皇女を納して妃とす。大来皇女と大津皇子とを生れませり。…：天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生しませり。（日本書紀 天武二・二・二七）

B 王子は、淡海帝の孫、大友太子の長子なり。母は淨御原帝の長女十市内親王。…：時に年三十七。（懷風藻 葛野王）

額田王の歌

① 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（一・八）

右、山上憶良大夫の類聚歌林を檢ふるに日はく、飛鳥岡本宮御宇天皇の元年己丑、九年丁酉の十二月己巳の朔の壬午、天皇・太后、伊豫の湯の宮に幸す。後岡本宮馭宇天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅、御船西に征きて、始めて海路に就く。庚戌、御船、伊豫の熟田津の石湯行宮に泊つ。天皇、昔日より猶し存れる物を御覽し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷しびたまふといへり。即ち此の歌は天皇の御製そ。但し、額田王の歌は別に四首あり。

《参考》

- a 御船西に征きて、始めて海路に就く。（日本書紀 齊明七・一・六）
- b 御船、伊豫の熟田津の石湯行宮に泊つ。（同 齊明七・一・一四）
- c 御船、還りて娜大津に至る。（同 齊明七・二・二五）
- d 天皇、朝倉宮に崩りましぬ。（同 齊明七・七・二四）

② 冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ歎く そこし恨めし 秋山われは（一・一六）

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競憐はしめたまふ時、額田王、歌を以ちて判る歌

③ 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積るま でに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 情なく 雲の 隠 さふべしや（一・一七）

反歌

④ 三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや（一八）

右二首の歌、山上憶良大夫の類聚歌林に日はく、都を近江国に遷す時に三輪山を御覽す御歌そ。日本書紀に日はく、六年丙寅の春三月辛酉の朔の己卯、都を近江に遷すといへり。

《参考》

a 都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓、都遷することを願はずして、諷へ諫く者多し。童謡亦衆し。日日夜夜、失火の処多し。（日本書紀 天智六・三・一九）  
b 皇太子即天皇位す。（同 天智七・正・三）

天皇、蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌

⑤ あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（一・二〇）

皇太子の答へましし御歌 明日香宮に天の下知らしめしし天皇、諷して天武天皇といふ

⑥ 紫草のほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも（二一）

紀に日はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、蒲生野に從獵したまふ。時に大皇弟・諸王・内臣と群臣、悉皆に從そといへり。

《参考》

a 天皇、蒲生野に縱獵したまふ。時に、大皇弟・諸王・内臣及び群臣、皆悉

に從なり。（日本書紀 天智七・五・五）

b 菟田野に葉獵す。（同 推古一九・五・五）

c 天皇、山科野に、縱獵したまふ。大皇弟・藤原内大臣及び群臣、皆悉に從につか

へまつる。（同 天智八・五・五）

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

⑦ 君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く（四・四八八）

鏡 王女の作る歌一首

⑧ 風をだに恋ふるは羨し風をだに来むとし待たば何か嘆かむ（四八九）

【倭 太后】

天皇聖躬不<sub>ま</sub>予<sub>ひ</sub>したまふ時、太后の奉る御歌一首

① 天の原振り放<sub>さ</sub>げ見れば大君の御<sub>み</sub>寿<sub>いのち</sub>は長く天<sub>あまた</sub>足<sub>た</sub>らしたり（二・一四七）

一書に日はく、近江天皇、聖躬不<sub>ま</sub>予<sub>ひ</sub>したまひて、御病急<sub>には</sub>かなる時、太后の奉<sub>た</sub>献<sub>ま</sub>る御

歌一首

② 青旗<sub>あをはた</sub>の木幡<sub>きはた</sub>の上をかよふとは目には見れども直<sub>ただ</sub>に逢<sub>あ</sub>はぬかも（一四八）

天皇崩<sub>かむあが</sub>りましし後、倭太后の作りましし御歌一首

③ 人はよし思<sub>や</sub>ひ止<sub>や</sub>むとも玉鬘<sub>たまかつら</sub>影に見えつつ忘<sub>わす</sub>らえぬかも（二四九）

大後の御歌一首

④ 鯨魚<sub>いさなと</sub>取り 淡海<sub>あふみ</sub>の海を 沖放<sub>さ</sub>けて 漕<sub>こ</sub>ぎ来る船 辺<sub>へ</sub>附<sub>つ</sub>きて 漕<sub>こ</sub>ぎ来る船 沖<sub>か</sub>つ權<sub>い</sub> いた

くな撥<sub>は</sub>ねそ 辺<sub>へ</sub>つ權<sub>い</sub> いたくな撥<sub>は</sub>ねそ 若草<sub>わかしら</sub>の 夫<sub>つま</sub>の 思<sub>おも</sub>ふ鳥立<sub>とりた</sub>つ（一五三）

